

愛知の博物館

No. 50



トヨタ博物館——広い展示空間の中で過去の歴史を彩る名車達を——

トヨタ博物館は、トヨタ自動車（株）の創立50周年記念事業の一環として計画・建設され、平成元年4月に開館した。場所は、名古屋市郊外長久手町の緑豊かな丘の上に位置し、一見、宇宙基地を思わせるような3階建ての近代的な建物である。ガソリン自動車が誕生してから100年間をとらえ、自動車の文化・技術の発達の歴史を実車を主体にして、体系的にわかりやすく紹介することを展示コンセプトとしている。展示台数は全体で110台であり、その内訳は欧米車が56台、日本車が54台である。日本車については、トヨタ車だけでなく、日本の自動車史を語るにあたり、歴史的に意味があるエポックメーキングな車を展示している。なお、展示車は毎日、順次整備され、常時走行可能な状態で保存されている。

その他館内には、自動車に関する図書約7,500冊を収蔵する資料室や、古い映像を自由に検索して楽しんでいただける映像資料室等の施設がある。

（トヨタ博物館 課長 前田三喜夫）

目 次

● 第37回全国博物館大会の共催について	2
● 東海三県博物館協会交流研修会報告	4
● 平成元年度美術部門研修会の報告	5
● 平成元年度自然科学部門研修会の報告	7
● お知らせ	8

第37回全国博物館大会の開催について

平成元年11月9日（木）と10日（金）の両日、名古屋市において第37回全国博物館大会が開催されました。この大会には、愛知県博物館協会も共催者として関わりましたので、その概要について、ご報告いたします。大会の開催要領は以下のとおりです。



1会期 平成元年11月9日（木）・10日（金）

2主会場 電気文化会館 コンサートホール

3主催 財団法人 日本博物館協会

4共催 愛知県 愛知県教育委員会
名古屋市 名古屋市教育委員会
愛知県博物館協会

5後援 文部省

6大会テーマ

生涯学習と博物館Ⅱ—その発展のための現状と問題点

7日程

11月9日 10:30~11:00 開会式
11:00~11:30 全体会議
13:00~14:00 基調講演
11月10日 9:20~10:20 全国博物館会議
10:20~12:20 パネルディスカッション
13:00~16:00 決議案起草委員会
博物館視察
16:00~17:00 全体会議

*11月11日 エクスカーション（希望者のみ）

全国博物館大会は、日本博物館協会加盟館と開催地の博物館の参加を得て、博物館の共通の課題・問題などについて討議するとともに、博物館相互の交流を図るもので、年1回開催されています。

今年は、名古屋の地の利もあってか、大会参加者は、

約150館園・400名と多く、全国博物館大会史上でも盛大な大会の一つとなりました。

今回の大会テーマは、現在「生涯学習」の重要性・必要性が言われる中で、博物館への期待と関心が高まっていることを反映して前年に引き続き「生涯教育と博物館」でしたが、サブテーマは、「使命と可能性を追求して」から一歩進めて「その発展のための現状と問題点」へと変更されました。

大会の開会式は、主会場である電気文化会館のコンサートホールで名古屋市美術館副館長新海明敏氏の司会で行なわれ、日本博物館協会会长津軽義孝氏の挨拶により始められました。続いて、来賓である沖吉和祐文部省社会教育課長、新美富太郎愛知県副知事、平岩利夫名古屋市助役の各氏からご祝辞をいただきました。その後表彰式を行ない、永年勤続し他の模範となつた方83名と多額の寄付をされた方1名が顕彰され、日本博物館協会東海支部が支部表彰されました。また、「博物館研究」に最もすぐれた論文を発表した方に贈られる棚橋賞は、「西洋絵画の修復・保存について」を書かれた絵画修復家で美術史家でもある黒江光彦氏に贈られました。

表彰式に続いて全体会議にうつり、議長団の選出を行ない、科学技術館長久保俊彦、愛知県陶磁資料館長山田五夫、石川県立博物館長鳥宮実玄、名古屋市博物館長浅井嶃一の各氏が選ばれ、あわせて26名の大会決議案起草委員も選出されました。

昼の休憩をはさんで、「生涯教育と博物館Ⅱ」というテーマで文部省社会教育課長沖吉和祐氏による次のような基調講演が行なわれました。

これからの生涯学習を考える時、次の三つの課題があるであろう。

(1) 学習ニーズに応じた学習機会を整備するための連絡調整を行う必要があること。

(2) 学習者が学習の場にうまくアクセスできる環境作りの必要があること。

(3) 学習した成果が生かせる場を整備すること。

以上の三つの課題に基づいて、中央教育審議会では、生涯学習の基盤づくりということについて審議し、生涯学習に関する小委員会審議経過報告による以下の四点についていくつかの提案を行なっている。

(1) 生涯学習を支える施策は、教育、文化、スポーツ、職業能力開発など各種の分野にわたっているので、横の連絡を円滑にする組織体制を整備すること。

(2) 学習情報提供、学習相談、学習プログラムの開発、指導者の養成と研修などを総合的に行う生涯学習推進センターの設置を推進すること。

(3) 日常的な場で多様で高度な学習機会が提供され

るような生涯学習重点地域を作ること。

(4) 民間教育事業に対する支援のあり方。

では、生涯学習の基盤整備に伴い、社会教育の内大きな分野を担う博物館は、何をなすべきであろうか。生涯学習には縦と横の生涯学習があるといわれる。縦の生涯学習では、博物館は生涯学習の基礎基本を教える必要があると思う。更に、基礎基本を超えていろいろな知識・教養を習得できたり、体験できたりする場にするために、展示の個性化、相談事業や指導事業の充実、付帯事業の活発化などがますます重要となる。横の生涯学習から考えると、資料を中心に活動することとあわせて、博物館の中に図書館を設置したり、公民館的な集会施設を作るなど魅力的な活動を行なう必要がある。更に、学習ニーズの多様化に伴い博物館だけで対応できない問題もあるので、館外の協力をいかに活用していくのかが重要となる。これらの生涯学習を進めていくための基盤整備のために、三つの提案をしたい。

(1) 資料・情報のネットワーク化

例えば、情報の分類とデータベース化、資料の共同購入、合同企画展などを通じて、特色のある博物館活動ができるのではないか。

(2) 職員体制の充実

学芸員の専門性を高めると同時に、情報の提供や相談に応ずる能力といった基礎的な部分についてもう一度勉強しなおすことが必要だと考える。ボランティアの問題については、いくつか解決すべき課題はあるが、博物館の職員自身がボランティアを積極的に活用していくという意識改革も大切であると思われる。



(3) 運営基盤の充実

博物館のレベルを高めていき、館園の横の連絡を密

にする必要がある。財政基盤の充実も大事である。

生涯学習の時代において、地域の生涯学習センターとして開かれた博物館、楽しく遊べる博物館、学んだ成果が生かせるような博物館として、今後大いに発展していただきたいと思っている。

以上のような基調講演の後、以下の五つの分科会に分かれ、講師、助言者、参加者の間で3時間にわたり熱心な討議が行なわれました。分科会では設置者は同じでも、規模・性格などの異なる館園が参加していることを反映し、具体的な様々な事例と意見が発表され博物館と学校との関係、利用者へのサービス、学芸員の制度と待遇、博物館の運営など多岐にわたる問題について話し合われました。



テー マ

会 場

- 1 生涯学習と博物館Ⅱ（公立人文系）名古屋市美術館
- 2 生涯学習と博物館Ⅱ（私立人文系）電気文化会館
- 3 生涯学習と博物館Ⅱ（公立自然系）名古屋市科学館
- 4 生涯学習と博物館Ⅱ（私立自然系）電気文化会館
- 5 望ましい博物館への利用者の声 電気文化会館

この分科会の終了後、クラウンホテルで多数の参加者を集めて懇親会が開かれました。

大会二日目は、全国博物館会議で幕を開け、日本博物館協会の毛利専務理事から昭和63年度の事業及び会計報告と平成元年度の事業計画などの説明があり、いずれも承認されました。

パネルディスカッションでは、各分科会の代表者から前日の分科会の討議内容について発表があり、討議が行なわれました。

午後からは、決議案の起草が行なわれるのと平行して、委員以外の方々は会場周辺にある東海銀行貨幣資料館・でんきの科学館・名古屋市美術館・名古屋市科学館を見学されました。

大会最終日程の全体会議では、今大会の決議案が提案され、以下の趣旨の決議案が採択されました。

- 1 博物館は、生涯学習の中核的な機関として、文化施設・教育機関と緊密な連携を図り、楽しく親しめる博物館として特色ある積極的な活動を展開する。
- 2 前項の活動を効果的に行なうために、次のことを国及び関係機関に要望する。

- ① 博物館法の拡充、強化
- ② 学芸員等の資質の向上と待遇の改善
- ③ 税制上の優遇と配慮
- ④ 生涯教育の推進、博物館情報ネットワークの構築、私立博物館の振興のための補助・助成の強化

なお、この会議で次回開催県が石川県と決まり、石川県立歴史博物館長島宮実玄氏が開催地を代表して挨拶され、二日間に亘った大会は無事閉幕しました。

今大会の開催につきましては、大会の企画、運営、会場の提供、エクスカーションなど様々なことにつきまして博物館協会の会長館である愛知県陶磁資料館を始めとする多くの加盟館とその職員の方々にご協力いただきました。厚くお礼申し上げます。

(実行委員、名古屋市博物館主査 水谷栄太郎)

東海三県博物館協会交流研修会報告

知立市歴史民俗資料館 岡本茂史

平成元年11月29日(木)・30日(金)の両日、第14回東海三県博物館協会交流研修会が三重県伊勢市の三重厚生年金休暇センターを会場として開催された。初冬の寒空の下、62館81人という多数の参加者により、21世紀を目前に控えた今後の博物館活動の展望と課題について、研究協議・講演を通じて熱心な研修が行われた。当館は平成元年度新規加入ということで初参加であったが、事務局からの依頼でその報告を行うことになった。

日程 第1日目

- | | |
|-------------|------------------------------|
| 12:30~13:00 | 受付 |
| 13:00~13:15 | 挨拶 |
| 13:15~15:20 | 研究協議
「開かれた博物館・受身でない博物館」 |
| 15:30~17:00 | 講演(三重県博物館協会長)
「二十一世紀の博物館」 |

第2日目(見学会)

- | | |
|------------|---------------------------------|
| 8:30~12:30 | 三重県斎宮歴史博物館→伊勢神宮山田工作場→伊勢神宮→昼食 解散 |
|------------|---------------------------------|

参加館数が示すように一口に博物館と言ってもその設立目的・規模・内容、さらには現状で抱える課題は



さまざまである。その中で今回設定された協議テーマ「開かれた博物館・受け身でない博物館」は、言うなれば私達博物館人の心構えに関する問題であり、参加各館に共通する課題である。研究協議の設定テーマとしては適切なものと言えよう。

研究協議では各県1名ずつ、次の3氏の事例発表が行われた。

- ・愛知県 武豊町歴史民俗資料館 奥川弘成氏
「当館における教育普及活動について」
- ・岐阜県 (財)日本大正村理事長 三宅重夫氏
「ボランティア活動について」
- ・三重県 海の博物館館長 石原義剛氏
「スマソニアン博物館群を見て」

最初の奥川氏の発表は、博物館活動の重要な柱の1つである教育普及活動に関してのものである。現在運営が行われている自主サークル「友の会」誕生までの経緯を、資料館活動の重点に教育普及活動を捉えた動機とともに紹介し、現状での問題点や将来的展望を述べられた。教育普及活動は、社会教育機関である博物館の活動にあって展示や資料収集・保存と同等、いやそれ以上の意義を有するものである。特に、私どものような展示面積は限られ、展示替えもままならず、来館者数も漸次減少傾向にある小規模資料館ではなおさらのことと思われる。しかしながら現実的には、人的な問題などさまざまな制約の中で「見世物小屋」「文化物置」と化してしまってしまうことが多い。いかにして地域に根ざした活動を行っていくか、いかにして社会教育・生涯教育機関として機能させていくか、このことは博物館活動に当たる私達に与えられた永遠の課題であり、この点で武豊町歴史民俗資料館の試みは1つの方向性を示唆するものとして注目されよう。

日本大正村・三宅氏の発表は、昭和63年4月に岐阜

県明智町に開村した日本大正村の開村までの経緯を、これを支え現在でも続けられている町民のボランティア活動とともに紹介したものである。開村そのものには町おこし的色彩が強く、博物館活動とは質的に異なるものの、昭和58年の構想提言で謳われた「物質文化となった現代社会の中で、失われつつある古い文化や人の心を再認識する」「古い文化・施設を継承する」という開村目的は、現代社会に身を置き、物質に強く依存した日々を送っている私達にも当てはまる重要な視点である。また、来客の接待からゴミ拾い、花いっぱい運動といった形で町ぐるみで繰り広げられているボランティア活動も、住民参加型の地域に根ざした活動として評価できる。しかし、今後の指針として出された基本構想の中には学術面の充実が盛り込まれており、こうした面を、現在村の運営を支えているボランティア活動がどのレベルまでカバーできるかが課題となるであろう。

最後の石原氏の発表は、ワシントンに所在する14の国立博物館・スミソニアン博物館群の見学体験をスライドとともに紹介されたものである。日本の博物館には見られない、しかも重要と考えられる点が幾つか見られたので以下記しておきたい。まず第1には、現在（今日）存在するものすべてが博物館の資料となり得るという点である。石原氏は前回のアメリカ大統領選挙関連資料を例として挙げられたが、私達が通常資料の展示・収集を行う場合、ともすれば年代的に古いもの、現在には伝わっていない珍しいものに価値を見出だし、目を奪われる傾向にある。だが歴史というものを、人間社会またはこれに関係する事物の変遷・発展の経過（の記録）と捉えるならば、私達の生きる現代も歴史の一部であり、関連する事物もまた当然歴史資料として位置付けられるべきであろう。そのことから私達は、今後過去とともに現代にも十分目を向ける必要があるのではなかろうか。次に第2として、物質的資料を展示するに当たって、それを用いた人間への配慮を合わせて行うという点である。すなわち、博物館には実に多くの資料の展示が行われている。これらの資料はそれ自体多くのことを私達に語りかけてくれるが、それを用いた人間あるいは人間集団像を浮かび上がらせた展示は意外なほど少ないので現状である。人が利用・学習する博物館であるならば、その対象として人が存在することは不可欠である。私達博物館に携わる者は、常にこの点を留意しておくべきであろう。この他石原氏の発表には参考とすべき事項が多数あったが、結びとして述べられた「博物館精神の継承」について触れておく。それは、博物館の命は決して建物ではなく、あくまでも展示空間であること。そ

して、展示を行うに当たっても、何をどのような目的で展示するのかという博物館独自の主張を持つ、ということであった。確かに、「建物を作りさえすればそれで良い」といった考え方が一部に、しかも根強くあるのは事実であるし、またアメリカなどとは異なり、企画・展示など本来的に学芸員が中心をなすべき仕事に業者が参入し、画一的な展示空間が生み出されている。さらに、博物館活動自体の評価を、その内容ではなく来館者のみで推し量り、真に学術的でない確実に客を呼ぶ展示を志向する、といったイベント寄りの発想も芽生えつつある。石原氏の発言は、これら「博物館存立の危機」とも呼ぶべき現状に警鐘を鳴らすものであったが、私達自身も、現在博物館が置かれている状況、利用者のニーズを正確に把握し、21世紀という近未来での博物館がいかにあるべきかを模索・考究していくなければならないだろう。

事例発表後行われた鳥羽水族館長・中村幸昭氏の講演「二十一世紀の博物館」は、まさしく上記の点について、私達博物館職員の自覚を中心に話されたものであった。

以上雑駁な文章であるが、第14回東海三県博物館協会交流研修会の模様を感想を交じえて述べさせていただいた。報告とは程遠いものとなってしまったが、ご容赦願いたい。

平成元年度美術部門研修会の報告

平成2年3月2日(金)名古屋市昭和区汐見町の昭和美術館に於いて、美術部門の研修会が開催され、参加者は過去最高の52名であった。研修会は主として博物館に勤める人々の資質向上と情報交換のために行われるものであるが、今回からは愛知県教育委員会の後援を得て、そのため教育界からも参加者があり、内容の豊かなものとなった。

日程の概略を記せば以下の様である。

10：00～30 受付

10：30～35 開会の挨拶 当協会長山田五夫氏

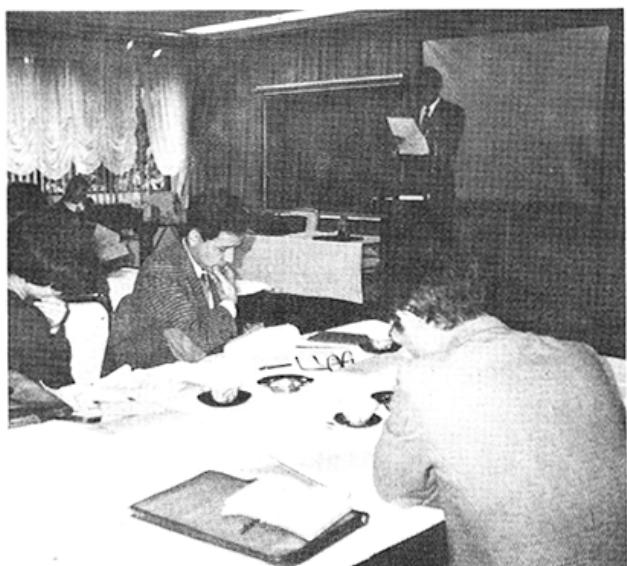
10：35～12：00 「イタリア・ルネサンスの美術」
　　フィレンツェ中心に絵画、スライドによる鑑賞
　　講師 磐谷桂治氏（愛知教育大学
　　名誉教授）

12：00～13：00 昼食

13：00～15：30 「絵画の知識と取扱い方について」
　　古美術（東洋絵画）工芸品取り扱い心得要領（準備、作業方、絵画の取り扱い調査の取方、調査の方

- 法、内荷造、態度等)
 講師 中村溪男氏（山種美術館顧問・元東京国立博物館主任研究官）
 15：40～16：45 最新情報産業の紹介
 ワキタ商会、日本ビクター㈱堀氏（システムエンジニア）
 16：45～17：30 軸装箱の制作（実技）

磯谷氏の講義はイタリア・ルネサンスの初期から盛時に至るまでの宗教絵画の流れを主に、スライドを使用して概略したものであった。ルネサンスは周知のようにイタリアに興った、古代ギリシャ、ローマに帰れという文芸復興で、美術界の活躍は他をリードするものがあった。中世イタリアの商業都市フィレンツェを中心にそこで活躍した早期ルネサンスのチマブエ、祖といわれるジオットから、初期ルネサンスのマサッティオ（様式の確立者、空気と光と色の効果を利用し写実的に表現）、ゴシック画家ジェンティーレ・ダ・ファブリアーノ、ウンブロフィレンツェ派ピエロ・デラ・フランチェスカ、そしてボッティチェルリに至る13世紀中頃から16世紀初期にかけて、画家の足跡を示す教会壁画を通して、描写のポイント、筆法、何を表現しようとしたのか、流れはどこにつながるのかを説明された。



磯谷氏は大学教官時代、毎年夏休みを利用して、学生達と共にイタリア・フィレンツェを中心とした地域のルネサンス期画家の活動跡を巡る旅行を催しており、既にその回数は7～8回にのぼった。また、個人としてスケッチ方々4～5回訪れているといい、こうした成果を踏まえての講義であった。その為か、なつかしい地を訪問するが如くの語り口で、所々氏の思い出が

混るものであった。専門的な知識を必要とする講義ではあったが、スライドに写し出される絵画は楽しく鑑賞することが出来た。

午後の第1の講義は実践講座であった。中村氏は長年（34年間）東京国立博物館にあって、文化財、美術工芸品を取り扱い、物の貸借関係の表裏をご経験されている故、それらの事例を踏えながら忌憚なく述べ、その心得を説明された。ご専門は絵画であるため、屏風、巻物、軸物の取扱い方、紐の結び方、梱包の仕方が中心で、各部の名称を混じえながらの説明は判り易かった。

先ず、美術工芸品を借用する場合は事前に物の寸法や状態の調査をし、写真のコピー等を調査書に貼っておけば間違いなく確認できる。名称だけでは不確な事が多く、複数あった場合などとまどいが生じ、相手に対しても失礼をすることになる。その場では調査書のコピーと照合し、物の状態を観察し、傷や破れ、折れ等を相手方と共に確認し、鉛筆で調査書に記録する。この場合、傷や折れの部分をポラロイド写真等に撮って置けばよりベターである。また、所蔵者に対しては、展示する状態の湿度、温度、ルックスなどを示す等細かい気遣いが必要で、物に対しても思いやりを持つことが肝要という。

このような説明をした後、実際に屏風、巻物、軸物の梱包を行った。学芸員は内荷造を行うよう心掛ける。今は業者まかせが多いが、これでは物に対する安全が欠けるのではないだろうかと指摘された。屏風は紙蝶番が弱くなっている場合が多く、そのため梱包した時はこの部分を下にして持ち運ぶことと、それが外見からも判る様マジックペン等で梱包した上に印をする。運ぶ時は、足もとが見えるように肩にかつぐのが良く、つまずきを防ぐ。巻物を納める手順は薄葉紙を使って巻緒（紐）の処理を行い、広げる幅は肩より少し広めぐらいに止め置き、見終えたら少しづつ巻き、新しい部分を肩幅ぐらいまで広げる。これを繰返して最後まで状態を確認する。箱に納める時は巻物を薄葉紙で包み、長軸の両端を少し長めに出し、ここを利用し箱と巻物とのすき間をなくし、揺れてもカタカタ音がしない程度にして納める。軸物を納める手順は、まず広げ、掛けて後、本紙の折れ、傷、中廻しや一文字のはがれ、軸木の状態等、表具まで丹念に観察、記録する。駄朴（巻緒）の巻き方に注意すること。三幅対の場合、右幅、中幅、左幅で巻き方が異なるので心すること。

最後は、風呂敷の使い方を実演された。風呂敷は大変便利でしかも有効に使う事が出来る梱包道具である。長方形や変形、球状のものまで包むことが出来、借用等には是非常備して欲しいものである。氏の講義は丁

寧でかんで含めるように説明され、額に汗している様は文化財に対する情熱が伝わってくるようであった。

第三の最新情報産業の紹介は導入に当ってどのような心構えが必要であるのか、今の情勢からシステムエンジニアの目を通して説明された。現在我々は物量豊富な中で、物では満足しなくなり、精神的な充実さを追求しており、博物館・美術館はこれに応える担手となりうる。しかし、人々はガラス越しで美術品を鑑賞することにはあき足りず、物に接してみたい触れてみたいという欲求が常に働いている。現状ではそうしたことは許されない。抛って映像を通じて見たものの裏から表、底、中まで映しだし触れるこの疑似体験や音や光で補助すること等が考え出される。こうした疑似体験（ショミレーション）を含めたシステムがこれから博物館や美術館に寄与出来る点である。その為に基本要素として、何をするのか、どんな機械を、ソフトは、組織や構造はどうするのかが必要となる。その上で、演出のために考え出されるハードシステムが映像、情報、環境、ショミレーション、検索、情感、参加の七つ掲げられ、実際このうちのいくつかが可動している。以上、大局的に述べられたが、要はハードよりもソフトである。

最後は軸装箱の制作実技であった。軸装箱のミニチュアを作るもので、箱の板、木クギ、サンドベーパー、ボンドがそれぞれ渡されて、皆小学校時代に戻って目を輝やかせながら制作に取り組んでいた。

（実行委員、熱田神宮宝物館 野村辰美）

平成元年度 自然科学部門研修会の報告

平成元年度の愛知県博物館協会が主催する自然科学部門研修会が平成2年3月9日(金)の10時から17時まで、名古屋市科学館において開かれました。参加者は35名で、自然科学系の博物館以外にも歴史・民俗学関係の人文科学博物館から、そして高校の先生方もご出席いただき、予想外の出席があり担当者としてほっとしました。今まで歴史・民俗学部門と美術館部門の研修会は開かれていたのですが、自然科学部門については加盟園館が少なかったこともあり、研修会が開かれずに過ぎていました。

しかし、加盟園館の増加にともない、自然科学系の博物館もお互いに情報交換を行ったり、勉強会を行ったほうがいいのではないかとの意見もできました。そこで今回の研修会を開催することになりました。それでは、どのようなテーマでやったらしいのかといろいろ検討しました結果、第一回でもあるのでな



るべく多くの園館が出席できるような各館共通の話題性があるものが望ましいだろうということで、今回のようなテーマになりました。

まず愛博協会長の山田五夫氏より挨拶があり、続いて名古屋学院大学教授、広瀬鎮氏「科学系博物館に求められるもの」についての講演、そして昼食後、名古屋芸術大学講師、高橋英次氏の「サイン計画の考え方、進め方」についての講義がありました。その後生命科学館に重点をおいた館内見学を行い、研究会を無事終えることができました。

それでは、講演内容を簡単に紹介させていただきます。広瀬鎮氏からは「科学系博物館に求められるもの」と題して、まず6つの柱が提示されました。

- I. 科学系博物館論の問題点
- II. 生活文化は「科学」の上に成り立つ
- III. 博物館における「科学展示」の意味
- IV. 生命・環境・生活の原理
- V. 自然・歴史・文化の原理
- VI. 感動からの知覚へ、科学系博物館の時代

〔スライド〕

この6つの柱を基に話が展開されました。

科学系博物館とは、どのような博物館を意味するのか。科学系博物館といつても展示の中には歴史的・民俗的要素や美術的要素が入っている場合もあるし、逆に歴史・民俗系の博物館の展示の中にも自然科学的要素が入っている場合もある。だからいちがいに博物館を種分けするのはむずかしい。すべての博物館は“科学館”ではなかろうか。たとえば先頃開館した「歯の博物館」^{※1}は“何博物館”と言ったらいいのだろうか。これは各々の特徴を持った博物館の集合体ではなかろうか。また「トヨタ博物館」^{※2}は自動車の美術館とも言えるのではないだろうかなど、具体例を挙げて説明されました。

博物館に今後望むこととして、観察・体験・学習ができるようにしてほしいとのことでしたが、これは博物館の人的問題であるので博物館側としても考えなければならないことである。このことも含めて単に展示解説だけをした活動から、それを利用できる活動に高めることが望まれている。これは、最近、博物館利用者の意識が高くなってきており、博物館としてもこれに答えるべく努力をしなくてはならないようになってきたことと多いに関連するのではないでしょうか。このあと、スライドを見ながらの各園館の活動内容の紹介がありました。

つぎに高橋英次氏の「サイン計画の考え方、進め方」の講演を紹介します。サインとは広義において、コミュニケーション手段全体を「サイン」といってもよい位であるが、一般的にサインということばの使われ方を大略分類すると以下のようになる。

非言語的伝達の諸形態には①身ぶり、表情、しぐさによる伝達②署名（所有物の主張など）③信号（判断、状況の変化）がある。表示工作物には④公共的表示（交通標識、案内表示）⑤商業的表示（店舗の看板商品看板）がある。非視覚的伝達には⑥音声、匂い、触覚による伝達などがある。

サインの発生は、生物のディスプレイ行動から始まり、人間社会に入ると先史時代の狩猟のサインの方法から古代、中世、近世へと時代により物の表示の仕方も変り、単純なサインから組み合わせによる複雑なサインになってきた。しかし、現在、町の中には交通標識や各種の標識などあらゆるもの表示板ができているが、これは市民生活を安全にするためのものが大半である。それは都市の風景を作っているものであるから美しいものでなければならない。今後サイン整備をすすめるには、固定観念にとらわれず、広義の「サイン」本来のもつ広汎な伝達機能性、手段の多様性に留意し、絶えず原点にたちかえった新鮮な発想も必要である。

以上、お二人のお話を簡単にまとめさせていただきました。今回はこのようなテーマで行いましたが、来年度のテーマについてこんなことをとりあげてほしいというのがございましたらお聞かせください。

※1 「歯の博物館」 名古屋市中区丸の内三丁目
愛知県歯科医師会館内三F
10時～16時 日・祝休館

※2 「トヨタ博物館」 愛知郡長久手町大字長湫字横道
41-100 表紙参照
(財団法人日本モンキーセンター 水野礼子)

お知らせ

1. 平成2年度愛知県博物館協会総会の開催について
総会を下記要項により開催しますので、ご案内致します。

④日時 平成2年5月17日(木)

④会場 王山会館、名古屋市千種区覚王山通り8-19
TEL052-762-3151

④日程(予定)

①総会

13:30～ 受付

14:00～ 会長、来賓各挨拶

表彰、新規加盟館紹介

議事

a 平成元年度事業報告及び決算報告

b 役員の改選について

c 平成2年度事業計画及び予算案

d その他

15:15～ 講演会「企業博物館について」(仮題)

講師 UCCコーヒー博物館

館長 諸岡博熊氏

16:45 終了

②懇談会

17:00～18:30 立食パーティ形式 希望者のみ

2. お詫びと訂正

平成元年11月30日付けで発行しました、ガイドブック「愛知の博物館」に下記のとおり、誤植がありましたので、お詫びして訂正いたします。

訂正場所	誤	正
19ページ 16行目	「阪之春」	「嶋之春」
110ページ 2行目	FAX <0567>	FAX <0569>
110ページ 5行目	毎週月曜日、祝日(月曜日にあたるときはの翌日)	毎週月曜日(祝日と重なるときはその翌日)

「愛知の博物館」No.50

発行日 平成2年4月10日

編集・発行 愛知県博物館協会

〒489 愛知県瀬戸市南山口町234番地

愛知県陶磁資料館内

<0561> 84-7474